

# 描かれた古墳出土品 — 明治十四年の発掘調査 —

宮川 禎 一

はじめに

京都国立博物館の考古資料部門の中に、明治時代に行なわれた古墳調査時の図面類五点が二件に分かれて保管されている。

「丹波国南桑田郡鹿谷村発掘古刀轡祝釜拓本」(丁乙58)

「丹波南桑田郡鹿谷村発掘古刀模本」(丁乙59)

の二件である。その資料の存在は以前から知られていたのだが、近年内容を精査するうちに、その資料のもつ重要性が徐々に明らかとなってきた。本稿ではその図面資料を紹介するとともに、古墳構造の特徴や出土遺物の位置付けおよびこれらの図面類が考古学史上に占める意義について検討を行ないたい。

## 一 古墳の所在地と現状

図面に残された「丹波国南桑田郡鹿谷村古墳」は、現在の京都府亀岡市葎田野町に存在し、古墳時代後期、六世紀代の群集墳中の一基であった。古墳群は亀岡市の遺跡分布図によれば南向きの谷間の

奥から丘陵部に分布するものである。遺物の出土した古墳は、後述するように、「茶ノ木山」の山頂部にあったようだ。現在その古墳は消滅しているという。

亀岡盆地は京都盆地の西方にあり、保津川の流域に開けた盆地である。古墳時代中期の千歳車塚などを除けば大型の前方後円墳は少ない。古墳時代後期の円墳が群集墳として盆地縁辺部の丘陵地帯に分布している。考古学的には京都大学の梅原末治博士による『南桑田郡誌』などに古墳の古い調査例などが掲載されている。また京都縦貫自動車道建設関係の調査で周辺の様子が明らかとなってきた。

## 二 博物館に収蔵された図面類

この鹿谷古墳の図面類が京都国立博物館に所蔵された経緯は明らかではない。昭和二十年に現在の作品台帳が整備された段階にはすでに存在していたが、それ以前にどのような経路で博物館に収まったのかは確認することができなかった。

図面は大小五点ある。そのうち遺物の図面を中心にした二巻（D・E）が長いものである。また小さいものは、A「古墳群までの略地図」、B「古墳の分布図」、C「墳丘および石室図」が描かれたものである。それぞれ薄い和紙に墨書され、一部には彩色されたところもある。

この絵図面の作者が遠藤茂平という絵師であったことは署名によって明らかである。そしてこの図面が描かれた経緯を図面Dの冒頭部分に遠藤自身が記している。

明治十四年四月丹波国南桑田郡

鹿谷村山中古墳ヨリ古刀及轡祝瓮

之類ヲ掘出シタルニ付右寫生ノ為メ社

寺係半井真澄氏ニ随行シ帰府ノ上

淨寫二本ヲ製ス右御用現品ヨリ

寫シ得ル所ノ□□ナリ

十四年七月四日□□

遠藤茂平

この記述によれば明治十四年（一八八一）四月に丹波南桑田郡鹿谷村で古墳から遺物が発見されたため、遠藤茂平は京都府の仕事として社寺系の半井真澄に随行して古墳から掘り出された刀などの遺物を図化するために丹波の鹿谷村へ出向いた（出向いたのは五月になってかららしい）。そして京都府に戻ってのち図面の浄書二つを作った。そしてこの図面はさらにその写しとして製作された（七月のこと）。遠藤茂平は京都府の正式な職員ではなく、このような京

都府の仕事を引き受ける嘱託絵師という立場であった。

遠藤茂平の業績は、幕末史研究者である多田敏捷氏によると、幕末の京都で出版業を営み、維新直後は新政府太政官の印刷業務などを請け負っていたという。また京都国立博物館が収蔵する「伏見鳥羽戦争図草稿」を描いた遠藤蛙齋と同一人物である。この伏見鳥羽伏見の戦いの絵巻草稿である。遠藤自身が戦闘のあった現地に赴いて取材し下図を描いたとされるものである。

続いてA～Eまでの図面を順に記述検討していく。

A、古墳群までの略地図（図版13）

縦二四・五cm、横三三・三cm。和紙に墨書。

一見ただけでは分かりにくい図であるが、保津川沿いの亀岡盆地から古墳の存在した鹿谷村付近の地図である。「亀岡」「並川」「幸田」「チトセ」など現存の地名が記されている。図の右側に「北」の文字、その下に「土田□□シラヘ」とある。図の中央やや上側に「ロクヤ」の字が見える。ここが鹿谷古墳の所在地である。図そのものは清書されたものではない。別に清書が作られた可能性がある。

B、古墳の分布図（図版14）

縦二四・五cm、横三三・四cm。和紙に墨書。

右上の注記によれば、「鹿谷村惣代ノ代理」某氏の図を「写」と記されている。図面には上が「北」右が「東」と記され、下部には「鹿谷人家」とある。大きく弧状に描かれた山塊とその南側の谷部の小尾根上に分布する群集墳が描かれている。また小字名や地区境

界などが細かく記されている。原図が地元的地籍図に由来するものであることを示している。注意すべきは、古墳には塚だけのもの（穴ナキ塚）と、石室の開口したもの（穴アル塚）の二種類があることを区別して記していることであろう。

実はこの図とほぼ同じ図面を英国人ウイリアム・ガウランド (WILLIAM GOWLAND) も残している（ガウランドは一般にゴウランドあるいはゴウランドとも記されるが、本稿ではガウランドと呼称する）。ガウランドは明治五年に大阪の造幣局に貨幣鑄造の技師として着任した、いわゆる御雇外国人の一人であった。日本での在任期間中（一八七二―一八八八）に日本の考古学的な遺跡、特に横穴式石室をもつ古墳に興味をもち、天皇陵を含めた日本各地の古墳の調査を行なっている。日本の古墳研究の始祖のひとりと評価される人物である。そのガウランドも同時期にこの亀岡の鹿谷古墳を訪れて写真を撮影し、石室を測量し、帰国の際に出土した遺物を英国へもち帰っているのである。そしてガウランドは調査ノートとともに、この鹿谷村の古墳分布図等を大英博物館に残している。鹿谷村でのガウランドの調査の実態や古墳分布図は『ガウランド 日本考古学の父』（責任編集 ヴィクター・ハリス、後藤和雄、平成十五年 朝日新聞社発行）にかなり詳しく記述されており、京都国立博物館に残る遠藤の図面と対比することができる。

遠藤とガウランドの残した図面を比較すると、日本語と英語の差こそあれ、ほぼ同一の地形図・古墳分布図であることは明らかである。ガウランドの記した英文を子細に読むとChanokiyama（茶ノ木山）<sup>1)</sup> shoazana Higashitani（小字東谷）<sup>2)</sup> Shoazana Tokkoda（小字独鈷田）<sup>3)</sup> Senjyuji（千手寺）など、遠藤が記す小字名や寺院名まで忠

実に音訳されている。両図の関係は、おそらく遠藤が地元的地籍図を写したもののうえにガウランドが踏査した古墳の場所を落とし、それをまた遠藤が写し、地名などは遠藤の指摘に従ってガウランドが記したものでなからうか。

明治十四年（一八八一）の段階で「古墳群」という考古学的な概念が日本側の半井や遠藤にあったとは思えない。遠藤は出土品の図化を依頼されて社寺係に同行した絵師であり、考古学者ではない。古墳から出土した遺物の図を描くことは業務として当然であるが、遺物が出土した古墳以外の古墳を群として記録する発想が彼にあったとは思われないのである。一方、ウイリアム・ガウランドには考古学的な素養があるので、遺物が出土した古墳のみならず周辺の同様の墳丘がどのように分布しているのかに興味があったのであろう。ガウランドの記録に「絵師エンドウ」の名前が出てくるので、両者の間に具体的な接触があったことは明らかである。この古墳分布図は、現在ほぼ消滅しているとされる鹿谷古墳群の分布状況を知ることのできる大変貴重な図面である。遠藤が開口古墳とそうでない古墳とを区別して描いているのも、ガウランドの調査図面を参照した証ではなからうか。

後述する遺物の出土した古墳の位置であるが、図Bでははっきりしない。またガウランドの図でも明確ではないのだが、「茶ノ木山ノ峯」と遠藤が記すところと、ガウランドの図に見られる登山道のような表現から、遠藤が「字茶木山」と記した「字」の字あたりの標高の高い地点にあったのではないかと推測される。

C、墳丘および石室図（図版15）

縦二六・〇cm、横三七・〇cm。和紙に墨書彩色。

遠藤が、

「茶ノ木山ノ峯ニアル古墳直上ヨリ見ル圖」

「古墳ヲ右側面ヨリ見ル圖」

「石郭内古器所在ノ位置直上ヨリ見ル圖」

「石郭内ヲ切斷シ側面ヨリ結構ヲ見ル圖」

の四つの図面を描いたものである。彩色のある前二者と墨描の後二者がセットをなす。

墳丘図は平面図と側面図の二種類であり、現在のような等高線で表現される平面図ではないが、彩色とケバ線で表現されていて、現状でもその表現意図は明らかである。

「茶ノ木山ノ峯ニアル古墳直上ヨリ見ル圖」は円墳の平面図である。墳丘の中央部には、内蔵されている横穴式石室（記述は石郭）の平面図が投影されている。その石室の上には甲乙の二字があり、それぞれ発掘孔であることを示す。右下には「甲 此穴ヨリ刀及ヒ轆等ノ古器ヲ採リ出シタル所、人三名ヲ入ル可キ廣サ」とある。この記述から遠藤茂平自身もこの穴に入ったものと思われる。さらに「乙 此穴漸ク人一名ヲ入ル可ク甚タ狭クシテ立ツコト能ハス古器類無シ」とある。他の図と対応させると、甲の穴が石室奥壁側、乙の穴は石室の羨道側の穴であることが分かる。この墳頂部の発掘孔の周囲には五箇所の小規模な盛り上がりがあり、それらは梅花状の配列を見せている。丙・丁・戊・己・庚と記された盛り上がりは「丙ヨリ庚ニ至ルモノ五箇ヲ周リニ配列スルコト梅花形ヲ為ス」とある。この事実がガウランドも記録していて「その周辺には日本の

紋章の梅鉢紋の花びらのように、小さな5基の陪塚が並んでいます」と記している。ガウランドの記述だけを読めば、墳丘の外側に離れて陪塚が点在するように読めるが、この遠藤の図面を見ると実際は墳丘上の五箇所に小規模な盛り上がりがあるというのが正しい。現代的な知見からすれば、村人の発掘に伴う廃土の盛り上がりが偶然にも意味ありげに墳丘上に配列されているように見えた、というのが正しいであろう。このガウランドの記述から、彼は遠藤が清書したこの墳丘図の写しを英国へもち帰っていたことも推察される。

墳丘の周囲には「此筋周囲壇ノ如ク少シ平面アリ」「此筋東北ニ巡リテ堀ノ埋マリタル如ク凹ナリ」「此処石垣ノ如キ石見ユル」などと、その観察と記述の正確さが窺われる記述が加えられている。

次は「古墳ヲ右側面ヨリ見ル圖」であるが、内部の石室側面図まで含めて描いている点に注意される。

さらに「石郭内古器所在ノ位置直上ヨリ見ル圖」と「石郭内ヲ切斷シ側面ヨリ結構ヲ見ル圖」とされた石室平面図と立面図は特に注目される図面である。

現代的の考古学の水準で見れば非常に拙い図である。しかしそれが描かれたのが明治十四年ということになれば話は異なる。古墳の調査というものが一般的ではなかったこの時代に、出土品の図はともかくも、横穴式石室の図面を描くことそのものが非常に珍しいことと言わねばならない。さらにスケッチではなく、平面図と立面図という表現方法は、また特異な描き方である。

まず平面図には「甲ヨリ入ル空処」「乙ヨリ入ル空処」「此辺ヨリ土ニテ埋リ入ルコト能ハス」の記述があり、石室の中央部が落ち込んだ土石によって埋まっていることが分かる。また羨道部も閉塞状

態であるらしい。甲・乙の二箇所が発掘孔である。石室図面にはイロハニホヘトチの記号が記され、イが「板石ヲ以テ構ヘタル棚ニシテ左右ニ接ス」とあり、石棚を示す。ロは「棚ノ下ニ自」で記述が途切れているが「石障」を指している。ハニホヘトはなにも記載が無いが、おそらく各遺物の出土地点を指すのであろう。この部分は文章による報告書に記載されていたと推測される。

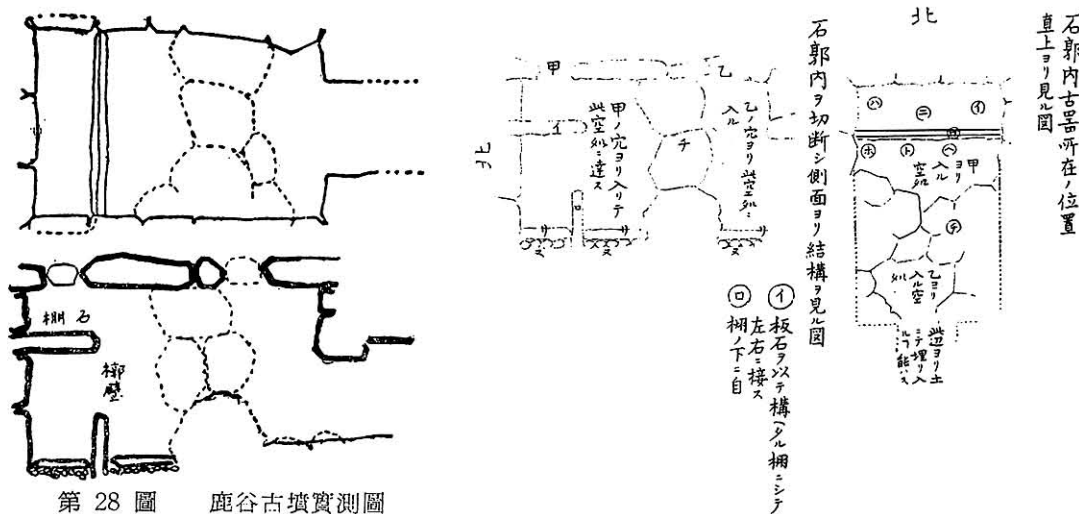
次に立面図であるが、イの石棚、ロの石障が断面で表現されている。またチが石室に落ち込んだ土石、リが敷石、ヌが敷石の下の礫敷であることまで分かる。

この平面図・立面図にもガウランドの影響があつたと考えられる。ガウランドはこの鹿谷古墳群で茶ノ木山の古墳（遠藤の残したこの図面）とは別の古墳の石室図を残している。両者の表現方法は全く同じというわけではない。しかし石室を平面図と立面図で描いているガウランドの実測図を遠藤が見た可能性はあるだろう。遠藤茂平はガウランドの実測作業と石室図面を見て、自らそれを取り入れたのではなからうか。しかしながらこれも遠藤がガウランドの図面をそっくり写したのではなく、自分なりの表現方法で描いているのである。

この横穴式石室を平面図と立面図（断面）で表現する方法は、現在の古墳の調査報告でこそ一般的であるが、明治十四年段階にはきわめて先進的である。明治二十年には島根県出雲市の上塩冶築山古墳の発見時に石室や石棺の平面図・立面図が「正投影法」で描かれているが、これはまだ特異な例であつた時代である（渡辺貞幸「東京国立博物館所蔵『出雲国塩冶村古墳石槨石棺図』について―正投影法で描かれた日本人による最古の石室図面―」『MUSEUM』

五六六 平成十二年）。

この鹿谷古墳の石室図は、明治三十年代に若林邦勝がこの遠藤の図面を使って石棚のある古墳として考古学界に紹介している（『考古學會雜誌』二ノ七）。さらに京都大学の梅原末治が『南桑田郡誌』にこの鹿谷古墳の図面をトレースして掲載している。梅原は東京帝室博物館の後藤守一が提供した図面をもとにしてしていると記している。その資料こそ、これらの図面類ではなかつたかと推測される。その意味では本資料が日本の古墳調査図面の先祖としてある一定の役割を果たしていたと言ふことができるのではなからうか。



第 28 圖 鹿谷古墳實測圖

第 1 圖 遠藤茂平の図面（右）と梅原末治図面（左）の比較  
（遠藤は図面 C より、梅原は『亀岡市史』より）

第1図に遠藤茂平の石室図面と『亀岡市史』に引用された梅原末治の図面を並べたが、両者を比較するとその共通性は明白である。遠藤の図面が学史の中で生きてきた証である。

その『亀岡市史』（昭和三十五年）上巻一〇〇頁に鹿谷の古墳群の記述があるので以下に引用する。

「菟田野町鹿谷の古墳群 菟田野町鹿谷の古墳群は、菟田野神社から大谷鉾山に通ずる道を行き山麓まで進むと、封土の散在が認められる。もつとも、近年、此の附近は大谷鉾山の廃石処理のため、殆んど埋没してしまつたと云つても過言ではない。しかし、幸いにも、それらのうち主要なものは梅原博士によつて調査されているので、ここに、博士の調査報告をもとにして述べておきたい。

梅原博士が調査された頃にも、この古墳群は石取りのため大部分破壊されていたようであるが、そのうち二例が紹介されている（中略）。その二は同じく、南面している横穴式石室を伴う古墳であるが、石室内に石棚が存する。この古墳は小字茶ノ木山にあるが、もとは周湟を伴う二段築成の丸塚であつたらしい。石室の構造については、既に若林勝邦氏によつて紹介（考古学雑誌二ノ七）され、後藤博士も注意されている。ここに参考のため、梅原博士の『郡誌』記載を記すと左の通りである。「構造は上述の現存石室と相似たる室と羨道の区別のある系統に属せること容易に察せらるるも、其奥壁面より扁平なる石材を挺出して石棚を作り、また、これと対応する底面には榔壁を立て、敷くに栗石と扁平石を以てせる特殊の設備を加へたるものなり。発見の当時此の石棚の西隅にあり、棚の下、榔壁内に直刀及金銅珠片等を存し、また壁の前に陶器を置き、室の西壁には直刀一口を立懸けありしと云う。此の遺物の配列より見る

に遺骸は榔壁内に置かれしものにて上述特殊の装置は蓋し、其の為に作られたものと解せられる」（『郡誌』二九〇頁）と述べられている（後略）」

ここに引用された梅原末治の『南桑田郡誌』の報告文を読むと、遺物が石室内のどの場所から検出されたのかが明らかであるようだ。それは明治十四年の半井の「報告書」には遺物の配置状況が記述されていたためと思われる。また「もとは周湟を伴う二段築成の丸塚であつたらしい」との記述から、遠藤の描いた墳丘の図面（図面C）を見ての認識であることは疑いない。

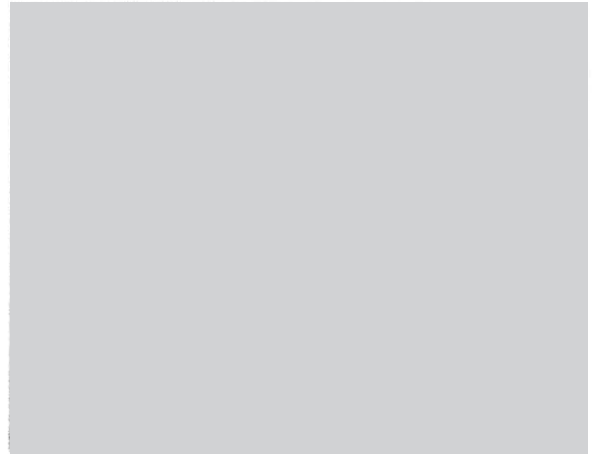
平成七年には亀岡市文化資料館で企画展「亀岡 発掘40年」が開催され、その図録の中の「ゴーランドが見た鹿谷の古墳」の項目で、遺構遺物の検討と石室内の想像復原図が示されている。また同図録の中で土井孝則が「石棚古墳の研究（一）——亀岡盆地に分布する石棚古墳について——」という論文でこの地域の石棚を持つ古墳を検討している。

遠藤の残した石室図面（図面C）へ戻ると、この鹿谷村茶ノ木山古墳の構造上の特徴は、すでに指摘されているように、石室の奥壁中に「石棚」をもつこと、その下に木製の棺を納めるための「石障」をもつことの二点である。このような構造の横穴式石室は非常に稀なものである。この鹿谷古墳群では、この調査古墳以外でも数基の石棚をもつものがあり、 Gowland が図化したり写真を撮影したりしている。

この図面Cは先のA・Bのような原図、スケッチ図ではなく、丁寧な文字で記され、淡い彩色もあり、明らかに清書されたものである。京都府庁に提出されることを前提に整理して描かれたのである

う。ただし完成図面そのものではないことは右下の落書きのようにみえる数文字から知られる（第2図）。

その字は「廓」「渠」「壕」という三文字である。これらの漢字は興味深い。遠藤が横穴式石室のことを「石廓」か「石郭」か、また墳丘周囲の溝を「堀」とするか「壕」とするか「渠」とするか「壕」とするか「渠」とするか図面の片隅に書いて考えたものではないかと推測される。その点で明治十年代という「考古学用語」がまだ無かった時代の記述の苦労がしのばれるのである。



第2図

#### D、遺物の図面1（図版16）

出土遺物の図面は二種類あるが、彩色のある方Dから見よう。縦二五・九cm、横五一七・七cm。和紙に墨・彩色。

D・①の右側は、前に掲げた「明治十四年四月」に始まる古墳調査経緯の記述である。「遠藤茂平」の署名の下には「樹木様」の落書きが見られる。

D・①の半ばからD・③までは二口の鉄刀の図面である。鉄刀二口が上下に描かれている。上側の長い方には「長三尺八寸五分 厚サ四 量四百十匁」と記述されている。図面での長さは一一五cm。

下段のやや短い方は「長三尺六寸五分 厚サ四 量二百六十目」と記される。図面上の長さは一〇八cm。刀の図面は目釘孔や銹や木質付着を含めてほぼ正確なもののように見える。

D・③の左側は前の刀のうち下段の短い方の茎部分の詳細なスケッチである。

D・④の右側は馬具轡のf字形鏡板の外形採寸図で、全長が「六寸五分」などと記されている。

同じD・④の中央部はf字形鏡板の実測図である。対となる左右の鏡板を対称に配置してその形状を正確に描写している。銹や金銅板の破損部まで描いて「錆ヘゲ」など細かい注記を行なっている。現代的にみても水準の高い図面といえる。

D・④の左側は同じf字形鏡板の裏側を写生したもの。ややラフではあるが、はみや引手の接続部を正確に写している点が注目される。ここには鏡板の拓本が上から被さるように貼られている。

D・⑤は剣菱形杏葉の実物大の図面で、丁寧に彩色されている。その図の横には「同種品五枚ノ内頭部ノ穴二環ノ如キモノ腐リ附タルモ左図ノ如シ」と記され、剣菱形杏葉が五枚あることと頭部の孔に接続する金具の方向の違いに触れている。

D・⑥はD・⑤と同位置のものだが、図面上にf字形鏡板拓本と剣菱形杏葉の拓本がかかった状態である。杏葉の拓本には「長七寸一分」の記載などが見られる。また左端に五稜形杏葉の拓本もある。

D・⑦は右から、f字形鏡板付轡のスケッチ、剣菱形杏葉の裏面スケッチ、鞍磯金具四片の図面、そして車輪形鏡板と呼べるような特殊な形状の鏡板二枚の図がある。この鏡板と後述の五稜形杏葉のセットは通常の馬具とは異なり、後側の鉄板をもたない、いわゆる

透かしのある鏡板・杏葉であった。現代的な馬具研究の観点からも非常に興味深い遺物といえることができる。

D・⑧の右側は、車輪形鏡板の接続状況のスケッチと五稜形杏葉二枚の図面である。遠藤が車輪形鏡板の構造と制作方法について模式図を描いていることは注意される。また五稜形杏葉に大小があり、大きいものが五枚、やや小さいものが二枚あることを記している。

D・⑨の左側には雲珠・辻金具・引手壺・鞍・方形金具など馬具の部品が描かれている。雲珠の表面には花弁状の毛彫のような文様を描いているのが注意される。全体に描写は正確である。

D・⑨の中央部には鞍の覆輪の破片、玉類の破片、そして「魚佩」とみられる鱗状の模様をもつ金銅小片の図が記されている。

魚佩は、冠帽あるいは帯金具あるいは飾履に付される装飾であるので、この古墳の被葬者が権力の高いことを示す金銅製の威儀具をもっていた人物であることを示唆している。なおこの遺物は大英博物館の収蔵品写真には載っていない。

D・⑨の左には須恵器破片の拓本が二枚ある。波状文なので脚台あるいは口頸部の破片の拓本である。また左端は須恵器子持脚付壺の破片のスケッチである。「甲」と記号が付されている。

D・⑩には須恵器子持脚付壺の蓋・肩部・体部・脚部・脚部の四部分のスケッチ、および前までの図面を受けて復元的に描いた須恵器子持脚付壺の図がある。遠藤は「甲乙丙丁ノ四図ヲ以テ推考シ全形ヲ為ス図」と注記している。図面Dの最後には須恵器の蓋杯の図が描かれる。この蓋杯は蓋を受けるたちあがりやや低くなつたものであり、六世紀中葉頃の特徴を示している。

#### E、遺物の図面2（図版17）

もう一方の遺物図。縦二三・八cm、横三〇〇・四cm。和紙に墨。冒頭に遠藤の筆とみられる注記があり、「十四年四月、丹波国南桑田郡□□鹿谷村山中古墳ヨリ掘出シタル古刀之摺もの」とある。

E・①～③はその刀二口の拓本である。目釘穴の注記がある。

E・③は車輪形鏡板付轡の拓本とスケッチ。五稜形杏葉の拓本と須恵器子持脚付壺のスケッチ。

E・④は須恵器埴の簡略なスケッチ。f字形鏡板の拓本。f字形鏡板付轡の接続スケッチ。引手壺・覆輪・雲珠・辻金具のスケッチ。

E・⑤は剣菱形杏葉の拓本。本図は以上。

この遺物の図面2（E）は先にあげた図面1（D）と比べるとずっと簡略で粗雑な図であるのが特徴である。Dが提出図に近いものとするなら、Eは現地での簡単な憶えの図、あるいは遠藤とは別人の手によるものではなからうか。描かれた遺物もほぼ共通している。Dに無かつたものはE・④右の須恵器埴だけである。

以上が京都国立博物館が所蔵する関係図面のすべてである。ここに描かれたもののうち、古墳については現況が不明であるが、出土遺物の大部分は現在ロンドンの大英博物館に収蔵されている。この収蔵品は『ガウランド 日本考古学の父』に写真と図面が掲載されていて、対応することが可能である。同書八三頁の「鹿谷古墳出土品一括」の中に、遠藤が残した図面とほぼ対応する馬具を中心とする遺物が掲載されている。杏葉の数も遠藤が注記している数と一致しており、その保存状態も良好であることが分かる。須恵器を含む遺物の詳細は同書の九四～九九頁に記載されている。この鹿谷古墳出土品の掲載された部分に鉄刀二口の記載は無いのだが、可能性と



しては同書一二一頁の出土地不詳の鉄刀二口がこの鹿谷古墳の刀ではないかとみられるのである。次に遠藤の図面と大英博物館収蔵品の対照表を掲げておく(表1)。

表1 遺物の対照表

遠藤茂平図面	大英博物館写真
鉄直刀	なし(一二一頁の刀か)
f字形鏡板付轡	一組
剣菱形杏葉	七点
車輪形鏡板付轡	一組
五稜形杏葉	七点
雲珠(花文あり)	一点
辻金具	七点
方形金具	八点
なし	素環鏡板付轡
引手壺	一点
鞍磯金具	六片
鞍覆輪	九片
金銅製魚佩形金具片	なし
玉破片	なし
須恵器子持脚付壺片	須恵器子持脚付壺
須恵器蓋杯	一点
なし	耳環

おわりに

以上、京都国立博物館が所蔵する明治十四年の古墳調査図面数枚について記してきた。

現状は図面類だけが残存している。本来は京都府社寺係半井真澄の「調査報告書」とともになければならぬものである。これについて、京都府立総合資料館において明治時代の京都府政史料を検索

したが、その調査報告書や半井真澄らへの調査命令書など、この鹿谷村での古墳調査に関係すると思われる史料は見あたらなかった。ウイリアム・ガウランドは「英国に帰国する際、京都府の役人であったナカライ氏の報告書と遺跡地図を持ち帰っている」と記されているので、報告書の原本ではないだろうが、その「写」は大英博物館に保管されているらしい。

ガウランドが亀岡の鹿谷村で古墳を調査することになった経緯や半井真澄・遠藤茂平との関わりは、『ガウランド 日本考古学の父』の一五頁辺りにかなり詳しく記述されている。ガウランドは、

「(一八八一年・明治十四年の四月) 鹿谷村の村長の立ち会いのもと、ドルメン(横穴式石室のこと) 内より作業員たちは、剣、馬具、あとで説明します土器等を持ち出しております。この発見が京都府の知事に報告されると、画家(遠藤茂平のこと) を従えた役人のナカライ(半井真澄のこと) 氏が遺物とドルメンを調べに派遣されてきました。そして寛大にも、報告書も図面も、すべて私たちに見せてくれました。遺物そのものの検証は、京都府の地方事務所の好意ある配慮により、亀岡で行なうことができ、しかも鹿谷村の村長がさらに細かい説明をしてくれました」(一八八三年七月十一日手紙) と記しているのである。

また『ガウランド 日本考古学の父』の著者のひとりヴィクター・ハリス氏は、ガウランドが帰国する際に「京都府の役人であったナカライ氏の報告書と遺跡地図を持ち帰っている」と記している。そしてこの報告書には「丹波国南桑田郡清水谷で、タケムラリザイモンほか十八名がどのように最初に遺物を発見したか」、「役人のナカライマスミは五月六日に吉田村の佐藤家に一泊し」その日、発掘

されていた品物が警察駐在所から運ばれたのでエンドウという絵師がそれを描いた」などと記述をしている。本稿で扱った遺物の図面が明治十四年の五月六日頃に描かれたことがこれらの記述で明らかなのである。本稿ではこの大英博物館に残る「報告書と遺跡地図」(分布図や墳丘図・石室図面・遺物図などを含む)と京都国立博物館に残る図面との照合はできなかったが、『ガウランド 日本考古学の父』の記述から、鹿谷村の古墳調査がどのようなものであったかをかなり詳細に把握できたのである。

さて、この鹿谷古墳の遺物がどのような経緯でガウランドの手に渡ったのかは同書には記述されていない。おそらく金銭を支払って購入したのではないかと推測される。その際、遺物を分割して一部だけ、状態の良いものだけを取得したのではなく、考古学研究者らしく小破片までも含めて一括で入手した点は評価できよう。おかげで明治時代前半の発掘出土品としてはほぼ完全な形で保存される結果となったのである。

以上述べてきた図面類と調査された古墳の特徴を列記しておく。

・明治十四年という日本の考古学史のうえで非常に古い段階の調査記録であること。

・出土遺物の図面だけでなく「古墳群」「墳丘図」「石室平面図」「石室立面図」など近代的な考古学概念と手法が図面に反映されていること。

・その考古学的記録の手法には英国人ウイリアム・ガウランドが影響を与えた可能性が考えられること。

・遺物の図面は当時の水準からすればかなり正確で、金属製品の破片まで漏らさずに記録しようとしていること。

・轡の連接部分や製作技法にまで注意がおよんだ図面であること。  
・須恵器の子持脚付壺の破片からその全体図を復元的に描いていること。

・遺物の図面の正確さと観察力の高さは絵師遠藤茂平の技量と知的水準の反映とみなされること。

・古墳は石室奥壁に石棚、その下部に石障をもっていて横穴式石室としては類例の少ないものであること。

・出土遺物の中で透かしのある車輪形鏡板や五稜形杏葉は日本の古墳時代の馬具の中でも極めて珍しい構造のものであり、研究上重要な遺物であること。

・出土遺物の中に金銅製の魚佩の破片を含むことが分かり、被葬者の権威の高さを示す冠帽・帯金具・履などの金銅製品の副葬があった可能性が考えられること。

・遺物の大部分と、半井真澄の報告書・遠藤茂平の図面の写しが現在大英博物館に収蔵されていること。

・須恵器の型式などから調査された鹿谷村茶ノ木峯の古墳は六世紀中葉頃の築造であること。